

『悪魔の陽の下に』における〈不安〉

野村, 知佐子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9932>

出版情報 : Stella. 10, pp.51-69, 1991-10-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

『悪魔の陽の下に』における〈不安〉¹⁾

野村 知佐子

ベルナノスの処女作『悪魔の陽の下に』（1926年出版）の構想が生まれたのは、彼がフレデリック・ルフェーブルのインタビューで述べているように、第一次世界大戦の直後である。祖国愛という美名の下にすべての精神的価値を転覆させ、個々人の死の尊厳までも欺きとった戦争について彼は証言せずにはいられなかった。すなわち、戦争は彼にキリスト者としての立場から「精神的なものの再建」をおこない、「正統的なものへの関心」を人々のあいだに呼びおこしたいという熱望を抱かせたのである²⁾。文学作品が時代の証言であることは否めない事実であるが、人々からすべてを奪いとった戦争は彼に「不安は充実したものであり不変なものだ³⁾」といわしめるのである。ではこの不安とはなにか。そしてそれは『悪魔の陽の下に』ではどのように描かれているのだろうか。ベルナノスのように戦争体験こそたないが、やはりキリスト者としての立場から不安という心的現象に肉迫し、そこに豊かな意味をみだした哲学者にキルケゴールがいる。本稿では、彼のおこなった不安にかんする考察をふまえて『悪魔の陽の下に』の主要な登場人物、ムーシェットとドニサン神父について分析し、ベルナノスにおける不安の豊饒さに迫りたい。

1. 〈不安〉とはなにか

キルケゴールは無にたいする人間のかかわりかたを不安としてとらえた。不安の対象とは無なのである。彼によれば、不安は恐怖とは異なる。恐怖を感じるとき人はなにか自分を恐れさせているか語ることができるし、恐怖の対象から逃げだすこともできる。これにたいして不安を感じる時、人はなぜ不安なのか語ることができないし、不安の対象から逃げることもできない。どうしてこのようなことがおこるのだろうか。それは不安の対象である無が、実は自分自身の姿だからである。ここで語られている無とは「なしうる」という生のま

まの可能性として存在しているのである。恐怖の対象から人が逃げだせるのは、それが完全な対象であるからだ。しかし不安の対象とは、対象であると同時に自分の姿なのである。人はけっして自分自身から逃れることはできない。したがって、人は不安の対象である無から逃れることができないのである。不安とは「なしうる」という自分自身の可能性を、自分自身のそれであるとは気づかずに、自分の外に見ている状態なのである。不安を感じるとき人は弱くなる。なぜなら人は対象のなかに自分とも対象ともつかぬものを見ているためにその意志が自由でないからである。不安を感じているとき、人の意志は呪縛された不自由な状態にある。意志が自由でないこの状態のとき、人は罪に陥りやすくなる。些細な仄めかしがあたえられると、それに向かって「なしうる」という不安な可能性が凝縮してくるために、正常な心理状態では考えられないことをしてしまうのである。これについてキルケゴールはつぎのようにいう。

不安はたとえてみれば目まいのようなものである。人の目が大口を開いている深淵をのぞき込むようなことがあると、彼は目まいをおぼえる。ところでその原因はどこにあるかといえば、それは彼の目にあるともいえるし、深淵にあるともいえる。なぜなら、彼はじっと見おろすようなことさえしなければよかったのだから。とうわけで、不安とは自由の目まいであって、精神が総合を定立しようとし、自由がいまや自身の可能性をのぞき込んでその身をささえるために有限性につかまるとき、目まいが起こるのである。この目まいのなかで自由は気を失って倒れる。〔…〕まさにその瞬間にすべては一変し、そして自由がふたたび身を起こしたとき、自身が責めをもつ身であることを知る。〔…〕不安のなかで責めある身となるものほど、両義的なものはない。不安は女性的な失神であって、この失神において自由は気を失うのである。心理学的に言えば、墮罪はつねに失神中に行われる。だが、不安は同時に最も自我的なものであって、どれほど自由が具体的に現われても、あらゆる具体化の可能性ほどに自我的ではない。[K. 259 - 260]

「自由が自身の可能性をのぞき込む」というのが、「なしうる」という生のままの可能性を見ることである。そして「その身をささえるために有限性につかまる」というときの「有限性」が、現実に行われる仄めかしである。この「有限性」に向けて、「なしうる」という「自由の可能性」は凝縮する。これが罪におちる一歩手前の心理状態なのである。また、対象のうち自分であるとも対象であるともつかぬものを見ているとき、その人の意志は呪縛された状態にあるといえるが、同時に不安というものは自分の外に自分を見るという自己凝視である。そして、その対象が「自身の可能性」という果てしなく増殖すること

のできるものであるかぎり、その自己凝視にはとめどがない。したがって不安とは、自我の喪失した状態であると同時に「最も自我的なもの」であるという二義性をもつ。以上がキルケゴールの不安についての考察である。これをふまえたうえで、『悪魔の陽の下に』に登場する悪魔がドニサン神父にたいしておこなった誘惑を分析しよう。

カンパーニュの夜の道で、悪魔はドニサン神父を誘惑するが、そこで重要に思われるのは、その誘惑の手段である。悪魔は神父のまえに、あらゆる悪の可能性としてあらわれる。この悪の可能性を現実にし、罪を犯させるために、つまり不安の無を凝縮させて現実のものとするために悪魔のとった手段は、ドニサン神父の前にその分身を出現させることであった。

一瞬彼ら〔2人のドニサン〕はむかいあっていた。その幻影はあまりにも精妙だったので、ドニサン神父は、はっきりと恐怖というものを感じなかった。どんなに力をふりしぼっても、自分の分身と自分を区別することは彼にはできなかった。それでも彼は、自分自身について統一性の感覚をなかば維持してはいた。そうだ、それは恐怖ではなかった、それは非常に鋭い切先をもった不安だった、そして彼自身の肉体をまとった敵という幻を屈服させることは、彼にはほとんど常軌を逸したことのよう思われた。しかし彼はあえて挑んだ。

「しりぞけ、サタン！」と彼は歯を食いしばっていた。[180-181]

ここで不安の対象＝分身は、ドニサン神父にとって、対象であると同時に自己である。だから彼には、自分の分身に挑むことがほとんど常軌を逸したことのよう思われるのである。人は自分自身から逃れることはできない。したがって人が不安のために罪におちるとき、その罪にたいしてその人に責めはない。しかしそれでもなお不安のためにおちた罪にたいして人は責めを負う。なぜなら人には不安の対象から目をそらす自由が与えられているからである。この悪魔との対決の場面では、ドニサン神父は不安の対象から目をそらす。つまり、分身をたたきつぶすことによってサタンの誘惑にうち勝つのである。ベルナノスが「誘惑とは人間の内部に、もうひとりの人間が生まれることであり、その恐るべき増大なのである」[239]というとき、不安こそ誘惑であるということができるとはしないだろうか⁴⁾。こういった観点からムーシェットとドニサン神父の心理分析をおこないたい。

2. ムーシェット

ムーシェットはひとりの友人もなく、父親マロルティの偏見のために教会からも遠ざけられて精神的な寄りかきをもたない。彼女が自殺するときその喉をかききった剃刀を不在の父親の部屋からとりだしたこと、その直前に母親が壁越しに彼女に声をかけたにもかかわらず自殺を阻止しえなかったことから、その孤独の深さはいかに知れよう。ドニサン神父と彼女の共通点として、なによりもまず孤独をあげることができるが、これは不安な性向をさらにつよめるものである。カディニャンとの出会いのとき、彼女は父親が読んで聞かせた新聞のかずかずの恐ろしい記事を思いだす。「農奴制や地下牢」、「首を吊られた人間」[64]の記事が彼女をおじけづかせる。思春期の少女が孤独に苦しみ、家庭生活を窮屈なものと感じ、そこから解放されたいと願うのは特別なことではない。倦怠にみちた日常からの解放という夢を恋人に託し、両親の、とりわけ父親の権威にたいしてうしろめたさを感じることも珍しいことではない。しかし、ここでムーシェットのいだいた恐れへの激しさは尋常ではない。彼女は地下牢や絞首刑のような重い罰に相当するなにかを予感しているのである。ここには彼女の「秘密」があらわれているのであり、したがって、彼女の悲劇をうみだしたものは彼女自身の内部に存在しているといわねばならない⁵⁾。

妊娠によってカディニャンとの情交が発覚したとき、ムーシェットは覚悟していた苦痛が感じられないことに驚く。そのために死んでしまうような羞恥を彼女はどこにもみいだせないのである。憎悪や軽蔑についても同様である。

「どういったらいいのかしら？ それは考えのように、めまいのようにやってくるの……滑おちていく、どこまでも、底の底までも、ばかものたちの軽蔑がおいかけてこれられないところまで、それなのにそこでもまだ満足できないの、なにかがまだ足りない」[97]

殺人を犯したのち、ムーシェットはかつて彼女を苦しめた人々のことばやまなざしがもはや彼女にとってなんの力ももたないことに気がつく。彼女は人々の憎悪や軽蔑の遠くおよばないところまで滑りおちてしまったのである。

この凌駕の構造は、ムーシェットのカディニャンにたいする思いにもあらわれている。永遠にその身を滅ぼしてしまいたいという思いに駆られて、彼女は家庭という小さな領土に君臨する父親にそむき、侯爵のもとへむかう。このと

きはじめて彼女は侯爵にたいしてなれなれしい口をきくのだが、それは彼女が悪徳の象徴として崇めていた愛人と同格になることができたという意識のあらわれとみなせよう。そればかりか、彼女はただちにカディニャンが父親と同様自分の安全な領土を好む小心な男にすぎないことを知るのである。愛人よりも自分のほうがはるかに強いというこの新たな認識は、侯爵への失望とはうらはらに彼女に「思いがけない甘美ななにか」[85] を与える。それは限りない力の横溢であり、彼女はそれを凝視する。ムーシェットはかつての悪徳の象徴であり、解放の象徴であった彼を、ひたすら眨め、引きまわしたいと望み、あらんかぎりの嘘で彼を苦しめる。

ひとつひとつの嘘が愛撫のように彼女ののどをしめつけるあらたな喜びだった。彼女はその夜、ののしられようが、うたれようが、たとえ生命を危険にさらそうが、嘘をついたであろう。嘘のために嘘をついただろう。あとになって彼女はこの不思議な発作を自分についておこなった最も狂気じみた浪費、甘美な悪夢として思いだした。[89-90]

彼女に嘘をつかせた力は、自分がその愛人よりも強いという認識に身をまかせることによってうみだされたものである。認識はかぎりなくふくれあがり、そのたびに彼女はさらに強くなっていくのを自覚する。この「狂気じみた浪費」は自己凝視である。不安というものが自己凝視であり、とめどのないものであるならば、ここで彼女の感じたものがたとえ喜びであったにせよ、彼女のおちいっている状態は不安であるといえよう。愛人への失望は、ムーシェットの激しさをしばませず、かえってそれをあらわにした。不安のなかで人が自分自身の姿から逃れることができないのならば、彼女もまた力の横溢した自分から目をそらすことができない。彼女の意志は自由を喪失する。このときムーシェットの侮辱に激怒したカディニャンは彼女を凌辱するのである。この決定的なできごとによって、愛人を眨め、ひきまわすことしかのぞまなかったムーシェットの力の横溢は焦点をあたえられて凝縮する。それはカディニャン殺害という現実となってあらわれるのである。カディニャンによる凌辱がムーシェットの自尊心を傷つけて、彼女に意志の力で殺人をえらばせたというよりは、むしろカディニャンの失墜によって認識された彼女自身の力が、凌辱というできごとを契機にしてほとばしったといえるのではないだろうか。

カディニャンを殺害したムーシェットは窓を開き闇のなかに消える。家をとびだし、目の前の闇を解放空間と信じて走りぬけた彼女は、今いちど闇のなか

に身を投じる。ベルナノスの作品世界において、道とは開放の象徴なのである。しかし、ムーシェットの求める解放は、観念の世界にしか存在しない。雑多なものの複合体である現実世界はつねにわれわれに不完全なものしか与えない。したがって、彼女の求めるものはけっして与えられることはないのである。倦怠にみちた生活にもどったムーシェットは力の横溢をもちやどこにもみいだせない。ただ殺人という罪だけがとりかえしのつかぬ現実としてのこっているだけである。

カディニャンを殺したムーシェットは彼の庭園を夜ごとにさまよい歩いた。無限の解放空間として開けた闇のなかの道は、目的地として死者の眠る壁が定められ、そこになん度もあしをはこぶという単調な反復行為によって閉ざされた空間となる⁶⁾。カディニャンの墓とはすなわち彼女の犯した罪であり、それは獣をつなぐ杭のように彼女をつないでいる。2番目の愛人であるガレの否認によって殺人の事実が虚構のものとされたとき、彼女の罪はだれによっても裁かれることはなくなった。しかし、罪から解放されるということはけっして罰から逃げおおせることではない。むしろ罰をうけることによって、罪人は失った世界との連帯を回復するであろう。罪からの解放とは、罪によってせおわされた苦悩をだれかが理解するというにほかならない。ガレ医師による告白の否認がいかなる孤独のなかに彼女を閉じこめ、かつまた彼女を貶めたかはいうまでもなからう。狂気というレッテルをはられたからには、ムーシェットの凶暴な夢はもはや世間にスキャンダルをまきおこす力さえない。罪はその実質と意味とを完全に喪失したのである。心ひそかに「絞首刑」や「死刑」に値するほどのなにかを予感していた彼女の生涯は、その激しさゆえに失望の連続であった。「彼女の凶暴な魂の唯一のなぐさめ」[196]は、自身を「馬鹿者や、臆病者たちのなかにいる数奇な運命の女主人公」[209]と見なし、傲慢さゆえにもはや彼女になんの内実ももたらさぬ罪に意味を与えることだけである。罪にしがみつにつづけることは新たな罪をうみだすことである。しかし、さらに忌むべきことは、罪を忘却しきって日常生活のなかに埋没することではあるまいか。罪への固執は、ムーシェットの傲慢さのあらわれであるが、灰色の日常生活にうずもれることへの拒絶、すなわち解放へのあくなき執着であるといえまいか。彼女のこの思いは、カディニャンの領地の城壁でドニサン神父が近づいてきたときの「ねえ！ さっきからあなたの足音がきこえていたわ。とうとう戻ってきたのね」[192]ということばに凝縮されている。ムーシェットはドニサン神父をよみがえったカディニャンだと思いこむのである。彼女の苦悩を

幻視の力でみぬいたドニサンは彼女を侯爵の墓から遠ざけながらつぎのようにいう。

「わたしは最初ただあなたを遠ざけてあげたかった。なぜならあなたにも自分がここで待っている死者はもうあそこにはいないことがよくわかっているだろうから」
[196, 強調はベルナノス]

ミシェル・ギョマルは、ドニサン神父のこのことばと、聖書のなかのキリストの復活を告げ知らせる「イエスはよみがえって、ここにはおられない」ということばとの類似性を指摘している⁷⁾。イエスの墓を訪れるということは、イエスを不滅の神の子としてではなく、ひとりの人間と見なすことである。だから、天使のことばは、人間としてのイエスが死んだという諦めをくつがえすべく投げかけられた、奇跡の訪れを知らせることばなのである。ムーシェットにとってカディニャンとは悪徳の象徴であったが、それはまさしくさかしまの救世主だったのである。イエスが復活したように、カディニャンはよみがえらなくてはならない。彼女を夜の彷徨すなわち自身の罪への固執から解放するために。そして死者の国から戻ってきた彼は、今度こそ生前の彼にムーシェットが託した夢を実現しなくてはならないのである。カディニャンはドニサン神父に変貌した。復活した救世主カディニャンはもはや彼の墓のなかにはいない。ドニサン神父となってムーシェットのそばにいるのである。ムーシェットの罪への固執についてドニサンはつぎのようにいいはなつ。

「その考えを捨てなさい。神のまえであなたはあの殺人について罪はない。いまの瞬間に劣らずあのときもあなたの意志は自由ではなかった」 [200]

人は不安のなかで罪におちる。崇めていたカディニャンの失墜とともに、ムーシェットはえたいのしれぬ力の横溢に身をまかせたが、それは彼女自身の激しさにほかならなかった。人は自分自身から逃れることはできない。このとき個人の意志は自由ではない。したがって、「神のまえであなたはあの殺人について罪はない」というドニサン神父のことばは、カディニャン殺しという事件が、彼女の罪というよりむしろ不幸な過失にすぎないことをあらわしているのではないか。ドニサン神父の口から自分自身の内なる物語が語られるのを聞いたとき、ムーシェットはガレに拒絶されていらい諦めていた他人との連帯を生まれてはじめて体験するのである。

しかし、いわば独自性の証しというべき殺人の罪が不幸な過失にされてしまうことは、彼女にとって屈辱以外のなにものでもない。他人との連帯によって罪から救われたことが彼女には信じられない。自己凝視をやめることができない彼女にたいして、ふたたび幻視の力を発揮したドニサン神父は、その祖先の姿を見させる。ドニサンは彼女の罪の根源を幻視させた。こうして彼女の世間への挑戦、解放へのあがきは、祖先の罪にまで還元されるのである。これこそが、カディニャン殺害時に彼女の感じた力の横溢の源であり、「絞首刑」や「地下牢」を予感させた「秘密」なのである。だとすれば、彼女は祖先の罪を漠然と感じ、それにたいして不安な関係におちいることによって、罪を犯していたと見なせよう。だからこそ、祖先の罪のなかに自分の犯した罪と同じものを見たムーシェットには、もはや彼女の生と祖先の罪とをみわけることができないのである。

彼女は存在していることを、かつて存在したことを疑った。全ての抽象が彼女の精神のなかで形をとり、その胸にだきしめることもつきはなすこともできるものになった。[206]

ベルナノスによれば、抽象とは生命の宿らぬものである⁸⁾。ドニサン神父は、ムーシェットの生命の源というべき祖先の罪を暴くことで彼女の生命そのものを説明しつつし、それを抽象化させてしまうのである。ここにおいて彼は魂の救済者であるのをやめ、生命の殺戮者と化している。ムヌ＝スグレの「罪への盲目的な憎しみが、きみを罪人への軽蔑と憎悪にみちびいてしまったかもしれないのだ」[226]ということばのとおり、ドニサン神父はムーシェットの罪を憎むあまり、彼女の生命まで憎んだのである。

かくしてムーシェットのなかに死が内包され、彼女はそれにたいして不安な関係を結ぶにいたる。ここにほんの小さな仄めかしがあらわれたなら、不安はそれにむかって凝集するだろう。家に逃げかえり、ひとり部屋にとじこもったムーシェットは鏡のなかに自分の姿をみる。鏡のなかの彼女の「新しい視線」、「唇の狂気じみた歪み」[207]は、解体された生命すなわち死をさきどりしている。彼女は死相のうかびあがった自分の顔を凝視する。カディニャンを殺したとき彼女に一線をこえさせたものが凌辱だったとすれば、ムーシェットを自殺させるひきがねとなったもの、つまり質的飛躍をおこさせたものは鏡であるとも見なせよう。不安のただなかで人は己の姿に呪縛されて罪を犯す。した

がって、罪を犯すとき人は心神喪失状態であるが、同時にそこには異常なほど明晰な意識がともなっているのである。不安は、「すでに首に縄をかけ、怒りをこめて椅子を蹴り倒そうとすると、死を決意した不幸なものの眼に最後の光を灯す残酷な夢」[213]として、苦い杯を飲みほさせるように人を罪の完成へと急がせるのである。こうして彼女は鏡のまえに立ち、剃刀で喉をかききる。

ムーシェットの生は罪にまみれていた。その一生は祖先の罪の焼き直しでしかなかった。しかし、彼女が両親やその愛人たちよりも不安におちいりやすく生まれついており、罪が祖先の蓄積してきた罪にたいする不安から生まれたものなら、彼女の意志は自由ではなかったのだから、その意味で彼女に罪はないとはいえないか。少なくとも、彼女はまわりの大人たちの知っている悪徳を知らなかったといっても過言ではなかろう。最期のとき、彼女は教会の階で息をひきとることをのぞむが、解放への希求がついには彼女をしてすべての罪を拒絶させ、神に身をささげさせるのなら、これは、倦怠にみちた現実のまえに、激しい情熱がむなくしく空転しつづけたにもかかわらず、それを捨てなかったムーシェットの勝利であるといえるだろう⁹⁾。「反逆の精神があなたのなかにあるとき、神の名がそこにしるされているのをみたのだ」[197]というドニサン神父のことばのとおり、ムーシェットの反逆は、神の名の徴だったのではないか。レオン・セリエは、ムーシェットの解放へのあがきを、父なるものを求める彷徨であるとしている——現実の父親に失望した彼女は愛人のなかにその理想像をさがす、そして、その最期の瞬間、彼女が見いだすのは父なる神なのである¹⁰⁾。悪魔の勝利がいかに決定的にみえても、いつも人間の魂を荒々しく奪いとるのは「貪欲な神」¹¹⁾なのである。つぎに引くのは、告解室のなかで無残な死を遂げたドニサン神父の最後のことばの一節である。

どれほどいやしい人間にも秘密があります。それは人を清める有効な苦しみという秘密です。なぜならサタンよ、おまえの苦しみは不毛だからだ。[308, 原文イタリック]

彼のこのことばは、不安に苦しめられて罪におちた人間は、ほかならぬその不安によって浄化されるという逆説をあらわしているといえるだろう。

3. ドニサン神父

ドニサン神父＝ランブルの聖者が、ベルナノスの描くもっとも典型的な人物像のひとつ、すなわち「偉大なる幼年時代」の担い手であり、知的で冷ややかな懐疑主義者とは対極にあることはしばしば指摘されるが¹²⁾、反面にその純粹さが災いとなって、彼はつねに不可能なものを自分自身に課してしまう。そういう彼を抑圧から解放するために登場するのが慧眼なムヌ＝スグレ神父である。しかし、このムヌ＝スグレの「きみがわたしに期待していることばはきみの力をこえた誘惑かもしれない」[129]ということばに注意しなくてはならない。つまり、彼はドニサン神父にたいして解放者であると同時に誘惑者として働きかけるといふ二義性をもっているのである。

解放者としてのムヌ＝スグレは、ドニサン神父に聖寵をになう人間のもつ無限の可能性を開いてみせる。ムヌ＝スグレはドニサンを不安のただなかにおいてしまうことになる。ところで、キルケゴールによれば、その不安が深ければ深いほど人間は偉大なのである。なぜなら不安とは人間の外部にあるのではなく、人間がそれを生み出すのだから。したがって、どれだけ不安を強く感じるかということ、その人間がどれだけ内なる力をもっているかということである。だが一方、すでに述べたように、不安は人間を弱くもする。不安の対象とは自己自身の姿であるために、人間は不安によって呪縛されその意志の自由を失うのである。ドニサン神父は、恐ろしい不安のただなかで自分をつきおとせるほどの内的な力をもった人間である。しかし、彼の内的な力の偉大さとはうらはらに、不安のただなかであって彼は、たったひとつの目配せ、わずかな仄めかしによってさえ罪におちるかも知れぬほど弱くなっている。誘惑者になるかも知れぬというムヌ＝スグレの危惧はここにある。彼はドニサン神父が神の忠実な僕であることを確信したからこそ、誘惑者となる危険を犯してドニサン神父には聖寵が宿っているということを告げたのである。信仰心がなければ、自身の使命をまえにドニサン神父は不安のなかで滅びさってしまうだろう。彼に与えられた聖寵は、御心にかなうか、あるいは破滅するかという絶対的な選択を彼に迫るのである。

ドニサン神父のなかに聖寵がはいりこみ、彼の絶望や過失までもが栄光にいろどられたとき、突然ふりかえった彼は鏡のなかに自分の姿をみつめる¹³⁾。恩寵が彼の生を栄光で満たしたにもかかわらず、鏡のなかにうつったドニサン神父の顔は青白くひきつっている。それは、歓びを知らず悲しみに生まれついた

ために、神の聖寵を實現できなかった惨めな彼を映しだしている。鏡はここで誘惑者としての働きをする。自分の姿を映しだ鏡とは、自分の分身を出現させる道具だからである。ドニサン神父が鏡のなかの惨めで無力な自分を凝視するとき、彼のなかにはこれまで感じていた聖寵の歓びにたいして疑惑の念がわいてくる。「原因のわからぬ歓びなどただの幻影にすぎないかもしれない」、「聖寵の働きはこのような官能的な魅力をもっているはずはない」[148]と考えるのである。彼は聖寵の歓びを悪魔の誘惑ととらえる。だがそれはまさしく反対なのである。彼にすべての歓びは悪であるといわしめた絶望、彼をして悲しみに生まれついた自己を凝視させることこそ誘惑なのである。ガブリエル・マルセルのことばを借りれば、誘惑者は「傲慢さや淫乱さという姿をせず、自分自身への憎悪、もっと正確に言えば、絶望という姿をしている」¹⁴⁾のである。聖人は驕慢や淫乱によってはけって誘惑されない。誘惑者は聖寵の歓びのなかに忍びこんでそれを変容させ、絶望によって誘惑するのである。

自分のなかにはいりこんだ誘惑を滅ぼすべく自らを鞭打つとき、ふりおろされる鞭はただいたずらに彼の身をひき裂くばかりである。つぎに引用する静寂にみちた場面は、誘惑がいかに巧みに彼のなかにはいりこんだかをあらわしている。

目ざめたとき、太陽の光りは部屋を満たしていた。[...] そのとき彼は子供のような微笑をうかべた。恐ろしい仕事は終わった。終わってしまったのだ。完全にやりとげれたのだ。[...] いまや彼の思念は、かなたに、きわめておだやかな光のなかをただよっていた！ 彼はかつてないほど自分の思念を、静かで透明なものに感じていた。しかし説明はできなかったがそれは過去から切り離されたものだった。[...] 彼はふたたび自分自身をみだし、明晰で積極的な意識ではあるが、超人間的な解脱の境地で自分を観察していた。[151]

この場面で、ドニサン神父はまず最初に子供のようにほほえむが、これは彼が誘惑とみなした神から与えられた歓びを恐ろしい鞭打ちによって追いだしてしまったことに満足したからである。それに続いてあらわれる「静かで透明」な思念は、過去と切り離されたものであるが、彼はなによりもその「子供時代の数々の思いで」[142-143]のなかで神と結びついていたのではなかっただろうか。さらに彼は「超人間的な解脱の境地」で自己観察をおこなっているが、これは神の僕というよりむしろ、きわめて強い意志をもった英雄の行為であるといえよう。こうして悪魔は彼から聖寵の歓びを奪いとり、偽りの平安を与え

た。彼の悪魔への憎悪が、罪の宿っている生命そのものへの憎悪となったのはこのときである。彼のなかで生命への愛が抑圧された以上、おし殺された愛はいつの日か彼に復讐するであろう。それは、晩年の彼に死んだ子供をよみがえらせるという試練として迫ってくるのである。

以上のように罪の萌芽を描く第1部にひきつづき、劇的頂点をなすことになる第2部「ランブルの聖者」の冒頭部には、作品のタイトルに呼応する「悪魔の陽」という象徴的なことばがあらわれる。

破壊するために知り、そして破壊のなかで知識と欲望とを新たにすること、おお、悪魔の陽よ！ それ自体のために求められる虚無への欲望、おぞましい心の流出！ [237]

かつて無知と無経験ゆえの過失しか知らなかったドニサン神父は、観念の世界にしか存在せぬ恥や憎悪や軽蔑を求めてムーシェットが身をなげた落下状態のなかに投げいれられるのである。それは「闇の深淵へ、とどまることを知らずおちていくときの目眩に似ているもの」[237]である。ドニサン神父は不安を静めんがために、自分を不安にさせる対象を認識し、それが与える苦悩を味わいつくさんとする。だが不安の対象が無という実体なきものであるために、ブランショのことばを借りるならば、不安は「とどまることのないものでありつねに、それがとらえさせるものよりも強力」なのである。そのために不安は「けっして感じ尽くすこと」のできない感情で、ドニサン神父は不安が「作り出す苦悩にたいして始終おくれた状態」にあるために、なおいっそう苦しむのである¹⁵⁾。不安の対象を認識しようという努力は、不安を終わらせるどころか、新たな不安をひきおこしてしまう。かくしてこの認識欲は「破壊するために知り」、「破壊のなかで知識と欲望とを新たにする」果てることを知らぬものとなる。それでは、ここで彼をとらえた認識欲とはどのようなものなのか。

「神と人間とのあいだにはなにかがいる。しかもそれは脇役ではない……。比類なく狡猾で、頑固でわけのわからぬものがあるのだ。残忍な皮肉、残酷な嘲笑としかたとえられないようなものが。神もある時期、それに身をゆだねられたのだ」[257]

ランブルの聖者を苦しめたのは〈悪魔の仲介〉という観念である。神の聖寵のなかに悪魔が入りこむのを許されているのなら、悪魔の手によって汚されていない奇跡など存在しない。これは、神の忠実な僕であるドニサン神父にとって完全な不条理である。神が悪魔に身をゆだねるのなら、彼の戦いははじまる以

前に敗北を決定づけられているといえよう。

死んだ子供の枕辺に立ったときランブルの聖者は「神のなかに源をもつ直接的な直感」¹⁶⁾によって奇跡を成就させる能力が与えられたことを知る。たしかに彼のなかに誘惑が入りこみ、罪への憎しみが罪の宿る生命そのものへの憎しみにまでたったのなら、彼が生命の分配者になるということは彼にとって救いとなるはずである。しかし、彼は奇跡の成就することを恐れる。なぜなら神の聖寵はかならず悪魔の仲介を受けるのであるから。「自分自身を救え、いまがそのときだぞ」[245]という声がドニサン神父のなかで響きわたったとき、彼の不安は凝縮してくる。40日間の断食のとき、イエスのもとを訪れた悪魔は、高所からとび降りることによって自身が神の子であることを確かめるよう誘惑するが、イエスは「主なるあなたの神をこころみてはならない」とこれを退けた¹⁷⁾。聖人たるドニサン神父にとって、自分自身のために神をこころみることは大罪である。しかるに自分自身の救いのために、罪人たちを否み、天に救いを求めることこそ神をこころみる行為にほかならない。彼にとって奇跡の成就とは、御名のもとに奇跡をおこなう聖者となることを意味するのではなく、神をこころみるものとなることを意味するのである。神をこころみるものであるもうひとりのドニサン神父の姿を彼は、むかし悪魔と遭遇して自身の分身を打ちくだいたときのように、退けることができない。「神はわたしを弄ばれたのか」[264]という叫びには、神への不信の思いが凝縮している。

つねに現実そのものと思われ、われわれの運命がそれに結びつけられていた夢が消えさり、破滅が完全なものとなったとき、すなわちそれが終局にたったとき、不幸を呼び寄せ、その歩みをいそがせ、ついにはそれを味わいつくさんとする激しい欲望以外のどんな力がわれわれをつき動かすだろうか？ [264]

ここにはムーシェットや、おそらく彼が告解室で出会ったどんな罪人よりも、認識の魔というべき不安にとりつかれたランブルの聖者の姿が描かれているといえよう。彼はおのれの手にした破滅的な認識を味わいつくさんとして、それに身を投じる。まさに、「破壊するために知り、破壊のなかで欲望と知識とをあらたにする」悪魔の陽の下に焼きつくされんことを欲するのである。聖人なるものの無垢さ単純さにふれることで生涯最後の平安をうることを期待してドニサン神父をたずねたアカデミー会員のサン・マランにたいして、生きていたならば投げかけたであろう「おまえはわたしの平安をほしがっていた。さあ、

それをとりにこい！」[308] ということばの皮肉の痛烈さと同様、ここでは聖人と呼ばれた彼が、作家や哲学者を上回るといっても過言ではない極度の観念性に苦しめられるものとして描かれている。彼は聖人としてではなく、戦士として、死んだ子供に挑む。

彼は〔死んだ子供の〕眼を、哀れみがしだいに消えてゆく好奇心にかられた注意で、
 ついである種の残酷な焦りでみつめた。[266]

ドニサン神父にはもはや死んだ子供にたいする愛もなければ、その両親にたいするあわれみの気持ちもない。死者がよみがえり、それによって自分が神をこころみる者となるのを、彼は冷静なまなざしで観察しようとするだけである。たとえ自分の破滅とひきかえにしても、彼は奇跡が成就し、死の主人である悪魔が神のまえに敗北するのを見ることを欲した。認識することがすべてとなった彼は、なにか不用意な言動が奇跡を奪いさってしまうことを恐れる。祈りのことばは唇のうで凍りつくが、おのれの破滅を明晰に見つめる人間が神のまえに謙虚にぬかずくことは不可能であるといえよう。不可能を不可能であるがゆえに希求することの背後には、冷たい好奇心と、自分をその不条理な戦いに追いやったものにたいする憎しみが潜んでいる。聖人は不可能を希求するが、それは人々の苦しみにたいする愛ゆえである。そしてその愛の欠如のために、自身の魂の救いとひきかえにしても悪魔の敗北をみたいという彼の願いは、自分のためだけに奇跡を要求する行為、すなわち神をこころみる行為となるのである。したがって彼は子供をよみがえらせることができない。それはとりもなおさず、ランブルの聖者自身の生命の浪費を意味する。自分自身にもとづいたものでないとき、認識欲は高くなればなるほど非人間的なものとなる。認識獲得のために人間は自己自身を浪費するのである。

悪魔の勝利は彼の孤独を決定づける。ドニサン神父は彼の背後に「身の毛のよだつ笑い声」[270] を聞いた。それは、彼が神と2人きりで閉じこもったと思った部屋に、いつの間にか入りこんでいた母親アブレ夫人のものだった。わが子が目をあけた嬉しさに狂ったような笑い声をあげる母親の愛情の表出が、ドニサン神父にとってはまさしく悪魔の嘲りとなるのである。彼のつまづきの場で子供を思う平凡な母親が悪魔として働いたように、このつまづきののち、罪人たちの訪れる告解室は、彼にとって完全な地獄と化す。彼は罪人たちのなかに敵の姿を見、その攻撃を受ける。リュザルヌの司祭に彼は、カルワリオの

悲劇についてつぎのようにいう。

「カルワリオの悲劇、とあなたがたはいう……。しかしそれは、まちがいでなくあなたがたの眼をつぶすものなのだ、それ以外のものはなにもない……。〔…〕あのひとたちは神の死を昔話のように語る……。それを美化し、いろいろとつけ加える」[255-256]

無垢の身で、全世界の罪をになって死んだキリストの姿がランブルの聖者にかさなるように迫ってくる。そこには美しいものなどなにもないと彼は考える。なぜなら無垢の彼が罪というものはじめて知ったのは告解室のなかであったのだから。彼は平安を求めて集まってくる罪人たちに「獲物のように」[275] 追いまわされ、彼らが内に宿した敵の攻撃にさらされるのである。彼は無垢の身でありながら十字架につけられる。しかも神に身をゆだねた聖人としてではなく、孤独な歎びを知らぬ戦士として。こうして、彼のつまづきはもてるものすべてを彼から奪ったのである。

ランブルの聖者は不安によって破滅への道を一直線に歩んだ。しかしそれは彼に与えられた神の恩寵があまりにも大きなものだったからなのである。彼が生まれてはじめて聖寵の歎びを知ったとき、それは悲しみに生まれついている彼にとって受けきれがたいほど甘美なものだった。歎びを憎み、生命を謳歌できなかったために、彼のなかで罪に対する憎しみは生命そのものへの憎悪に達した。歎びを知らず罪にたいして絶望的な戦いをつづける彼に、神は愛の証しとして無造作に、死んだ子供を蘇生させる力を与えたのである。カディニャンを殺したムーシェットは彼の墓のまわりを回りつづけた。彼の墓が彼女の罪の中心点だったからである。これにたいし、ドニサン神父にとっての罪の中心点とは生命への憎悪である。それは死んだ子供となって彼の前にあらわれた¹⁸⁾。子供の死体は、戦士としてそれを見つめるドニサン神父にとっては誘惑であっただろうが、聖人として神に謙虚にぬかずく彼にとっては救いとなったはずである。魂の救いはつねに罪のなかから立ちのぼる。カディニャンの墓でまちつづけたムーシェットのもとに、かつての解放者であった彼は魂の救済者ドニサンとしてよみがえった。ランブルの聖者は死んだ子供をよみがえらせなければならぬ。もういちど生まれ変わるために。原罪によって断たれた神と人との和解は、幼子イエスによってなされた。ドニサン神父のまえに死んで横たわっている幼子のよみがえりとともに、彼は悪魔にうち勝つことができたはずであ

る。それは幼子イエスの彼の内での勝利であり、同時に彼自身を幼子として再生させるための神の愛であったはずである。ドニサン神父自身、自殺という決定的な罪を犯した瀕死のムーシェットを彼女の願いどおり教会に運びこんだのは、彼女の生をもういちどやり直させるためだったのではあるまいか。たとえ死を目前にしていたとしても、すべてはいつでもやり直されなければならないのである。

キルケゴールは『死に至る病』のなかで、人がキリスト教につまづくのは、その高さゆえだと述べる。不滅の神の子が、人間の救済のためにもっとも卑しい人間の姿をとり、その救いの手を受け入れてくれるよう懇願するというのは、人間的に考えれば狂気の沙汰である。あえて謙虚な勇気で信じることができなければだれでもそれにつまづくと。これは神の愛の大いなる矛盾である。キルケゴールはいう——「つまづきの度は、人間が驚嘆することにどれだけの情熱をもっているかにかかっている。[...] 並はずれたもののもとに謙虚にぬかずいて、信仰のできる状態に近づいていけばいるほど、つまづきもそれだけ情熱的となり、ついには、それを根こそぎにし、無きものにし、泥まみれに踏みにじらないでは気がすまなくなる」¹⁹⁾ と。ドニサン神父は、卑小な人間に与えられた大きすぎる栄光という神の愛の矛盾につまづいた。ドニサン神父は常人ならば、自分を狂人だと思いかねないような恩寵である幻視の能力を、単純に謙虚に受けとめることができたほど神の忠実な僕として生きてきた。その情熱のゆえにつまづきは激しく、罪は重い。神が悪魔に同等の力を与えており、そのために聖寵がいつも悪魔によって奪いさられてしまうのなら、神の正義はいったいどこにあるのかというのが彼の思いだったのではあるまいか。「やつとあなたと、どちらが主なのかおっしゃってください！」[268] と彼は神に正義を要求した。だが子供はよみがえらなかつた。彼が神に要求した正義はあまりにも人間的なものであったのである。

結 語

作品を分析するにあたって援用したキルケゴールは、絶望と不安のなかに人間の深さを見だし、それらをつうじて逆説的に神を見いだした哲学者である。ベルナノスの『悪魔の陽の下に』にも2つの逆説が息づいている。不安によって罪にそまったムーシェットは、ほかならぬその不安によって神に身を捧げる道を見いだした。一方ドニサン神父は、彼にあたえられた神の恩寵の多大

さゆえに、不安によって神をこころみるといふ大罪を犯した。罪人の罪への固執が神を呼び、聖人の神を愛するところが冒瀆のことばを吐かせる。もちろん、両者の関係は可逆的なものではない。しかし両者に共通するものはその情熱である。個々人が独自の立場から神を見だし、神と対決するという情熱である。その意味では、ベルナノスの立場と、神の前に単独者として立つべきであるとしたキルケゴールの立場には相通じるものがあるといえるだろう。しかし同時に、戦争体験が作品の直接的な契機となったことを思えば、ムーシェットとドニサン神父の苦悩の物語は、無意味な死を遂げた戦没者を聖人扱いすることで彼らの独自性をなきものにす戦争、精神的価値をことごとく破壊する戦争にたいしてあげられたベルナノスの激しい抗議の声であるともいわなければなるまい。

註

- 1) 『悪魔の陽の下に』のテキストとしては、プレイアッド版『小説集』(Georges BERNANOS, *Ceuvres romanesques*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1988) を使用し、同版からの引用にあたっては、そのページ数のみを本文中 [] 内に示す。訳出にあたっては、山崎庸一郎氏による邦訳(『ベルナノス著作集』第1巻, 春秋社, 1976年)を参照した。また、本稿でしばしば引用・言及するキルケゴール『不安の概念』については、田淵義三郎氏による邦訳(中央公論社「世界の名著」第40巻, 1966年)を使用し、ベルナノスからの引用と区別するために、[] 内ページ数のまえに K. と記す。
- 2) Frédéric LEFÈVRE, «Interview de 1926 par Frédéric Lefèvre», in *Essais et Écrits de Combat*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, p. 1040. このインタビューで、作品の書かれた意図は戦争が破壊した精神的なものの復興にあるのかというルフェーブルの問いにたいして、ベルナノスは同意を示している。
- 3) Cité par Albert BÉGUIN, *Bernanos*, Paris: Éd. du Seuil, coll. «Écrivains de toujours», 1954, p. 31. ベガンによればベルナノスは幼いころから死の不安にさいなまれてきたが、初聖体の日にはじめてそれをのり越えることができたという。17歳で彼は恩師であるラグランジュ神父に「幸せで良いものになくはならないのは人生ではなく、すべての終わりである死なのです」と書いている。
- 4) ベルナノスにとっての悪について、ウィリー・バークハドはつぎのように述べている——「存在論的にみれば悪は存在しない。それは反存在、非存在であるが、剝奪というかたちで存在する」(Willy BURKHARD, *La Genèse de l'idée du mal dans l'œuvre romanesque de Georges Bernanos*, Zurich: Juris Druck Verlag, 1967, pp. 27-28)。またクロード＝エドモンド・マニーは『ウィーヌ氏』について

の書評のなかで、実体がないが確かに存在し、人々から奪いつづける悪にたいして、「否定的実在 (réalité négative)」(Claude-Edmonde MAGNY, «*Monsieur Ouine, le dernier roman de Bernanos*», *Poésie*, n° 46, juin-juillet 1946, p. 110) という名を与えている。

- 5) アンリ・ジョルダンがムーシェットの解放へのあがきを、バタイユの『エロティシズム』にもとづいて分析し、ムーシェットの願うスキュンダルとは、「禁止」にたいする「違反」であると述べている (voir Henri GIORDAN, «Mouchette et l'érotisme», in *Études bernanosiennes* 12, Paris: Lettres Modernes Minard, 1971, pp. 101-110)。
- 6) ベルナノスの作品世界において、道と円環とは対立的なイメージである。前者が解放を象徴するのにたいして、後者は閉塞を象徴し、その内部では、運動は単調で不毛な反復になる (voir J. P. VAN SANTEN, *L'Essence du mal dans l'œuvre de Bernanos*, Leyde: Presse universitaire de Leyde, 1975, p. 93)。
- 7) Voir Michel GUIOMAR, *Miroirs de Ténèbres*, José Corti, t. II [1984], p. 61. なお、引用は『マルコによる福音書』第16章第6節。
- 8) 『ウィーヌ氏』で、不具の少年ギョームが主人公ステニーに、死者たちが自らの成就できなかったことを、生きている人間に実現させようとしているという話をするが、そのとき彼は、崇められている死者こそが本当に死んでしまったといえるのだと述べ、それにかんしてつぎのようにつけ加える——「崇めることは死者たちを模範に、お手本に、象徴にしよう。つまり抽象にしようんだ」(voir BERNANOS, *Monsieur Ouine*, in *Œuvres romanesques*, op. cit., p. 1388)。
- 9) 自身の罪や不安との戦いに勝利をおさめるが、その直後に命をおとすというテーマは、『田舎司祭の日記』で赤ん坊のところに死んだ息子のことで神を憎みつづけた伯爵夫人、『カルメル会修道女の対話』の、死への恐怖にとりつかれた女主人公ブランシュにおいても認められる。
- 10) Voir Léon CELLIER, «L'Attraction paternelle», in *Études bernanosiennes* 12, op. cit., pp. 111-120.
- 11) ベルナノスが好んで使ったことば。悪魔の欲望は恐ろしいまでの引きつける力があるが、貪欲な神は悪魔がつかまえるより先にその獲物に襲いかかるのである (voir BÉGUIN, op. cit., p. 76)。
- 12) Voir Jean SCHEIDEGGER, *Georges Bernanos Romancier*, Neuchâtel et Paris: Éd. Victor Attinger, 1956, pp. 19-24.
- 13) ベルナノスは、子供のころカービン銃を発射して、姉の部屋の鏡を割ったことがある (voir BÉGUIN, op. cit., p. 33)。この伝記的事実に対応するかのようになり、彼の作品では鏡は不安をうつしだす働きをしている。たとえば、『歓び』の主人公ジャンタルは、悪魔的なフォードルとの対話に不安をかきたてられて鏡をのぞくが、そこに映った自分の顔に祖母と亡き母の狂気が刻みこまれていることに気がつく (voir BERNANOS, *La Joie* in *Œuvres romanesques*, op. cit., pp. 568-570)。
- 14) Gabriel MARCEL, «*Sous le Soleil de Satan*, par G. Bernanos», *La Nouvelle Revue Française*, n° 153, juin 1926, p. 756.
- 15) Maurice BLANCHOT, *Faux Pas*, Paris: Gallimard, 1943, p. 49 (『踏みはずし』[粟津則雄訳], 筑摩書房, 1987年, 58頁)。なお、表記上若干の変更を加えた。
- 16) MARCEL, art. cité, p. 757. マルセルは、ランブルの聖者が死んだ子供をよみがえ

らせるのに失敗するのは自分自身にくわえた反省のゆえだとしている。

- 17) 『マタイによる福音書』第4章第6節。
- 18) セリエはムーシェットの死と、ランブルの聖者が死んだ子供を蘇生させることに失敗する場面に、ピエタと対をなす苦悩に満ちた父親像を見ている (voir CELLIER, *op. cit.*, p. 120)。
- 19) キルケゴール『死にいたる病』(榊田啓三郎氏訳), 中央公論社「世界の名著」第40巻, 1966年, 525-526頁。